

都市民俗への志向

はじめに

木村 龍生

民俗学の芽が、近世の国学者の中にすでに存在していたことは、今更こと新らしく言うまでもないことであるが、これが学問として（科学かどうかはひとまずおく）その立場をはっきりと築かれるようになったのは、なんといつても柳田国男の功績に依る。それは柳田国男の一生がそのまま日本の近代史であるとともに、民俗学の歴史になることを意味している。そして日本近代史は、西欧化にはかならない。西欧化は必然的に日本の前近代的なるものを否定しようとする、そのような動きの中に日本の近代化＝西欧化の図式が成立する。

このような時代背景の中で、日本の前近代的な事象に、己の学問的存在基盤を見出したのが柳田国男である。柳田は、近代化のなかで残留（Survival）なるものを探し求め、その伝承形態を重出立起することによって、「常民」の歴史を明かにしようとした。勿論柳田は近代的知識人であり、西欧知識を可能な限り吸収したエリートである。単なる伝統回帰に生きたわけではない。「明治六十年間に得たものは、確に失うてしまったものよりも多い」という認識がそれを示しているし、「明治以後の新教育のみが、俄然として人を野蠻から開明まで飛移らせるやうな力のあったわけでは無い②」

という主張に、「常民」の有する知識の豊富さを肯定している。

民俗学は近代化で変容を強要されている中に生き続ける民俗事象を研究対象としているのであり、これこそ民俗学成立の前提条件になっているのである。しかし従来とられてきた方法は、この強要をさしおいて、ひたすら残留（Survival）を集めることに専念し、報告し、それを歴史的变化として組みかえてきた。これによって得られた成果には確かに大きなものがある。しかし西欧化という圧力のもとで、民俗がどう変化し、維持されてきたか、あるいは消滅せざるを得なかったかといった問題はあまり取り上げられてこなかったような気がする。西欧化という言葉で表わされる百年間の歴史を顧ることは、私にとっては非常な困難を要するが、これを仮に戦後の急激な変化に置き換え、それとの関連で民俗事象の変容をとりあげることはできそうな気がする。

そこで私は、年中行事の変化と戦後の福生市の都市化傾向を相互関連的にとりあげて、右の問題を解明するひとつの足がかりにしていきたいと思う。その前提として、柳田国男の次の言葉を生かしていきたいと思う。

いよいよ落付いて何か考へてみようとなると、先づ以て念頭に浮ぶのは生活の永續といふ問題である。今度の豫期し難かりし大變革の後、①事実果してどれだけまでのものがなほ永續するであらうか。②又どれだけの部分が變らずに居

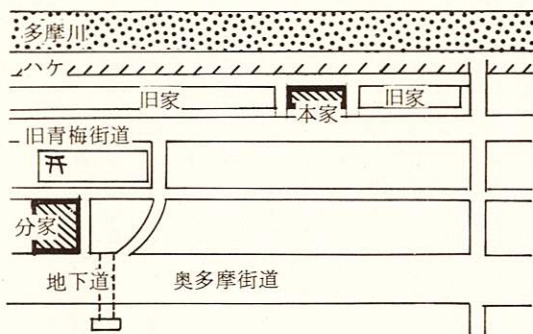
ることを以て、國乃至は民族の永續と名づけ得るか。③第三には我々の意思もしくは判断の力を以て、永續させ又は中止させることの自由なる區域は、どこまで擴がつて居るであらうか。論議は是からさきも暫ら暫ら燃えるであらうが、もしも學問を解決に利用とするならば、順序としては是非ともこの入口から入って行かなければならない(3)。

「子無しと子澤山」の昌頭であるが、これが昭和二十一年十二月に書かれた時、柳田は右の三点に、戦後の學問の出発を設定した。この三点に答えるには容易なことではなく、戦後三十年たった現在ですら満足な解答を提出することはできない。しかしこの柳田の提起を生かしていくことは必要であり、それには実際の民俗事象という現象面での変化と、それを變化せしめた要因を考え、両者の相互連関の中からひとつの仮説を押し出し、それをくりかえし修正していく方法がとられるべきではないだろうか。このような作業をするにあたっては、地域の限定とその地域のもつ歴史的 성격、社会的性格を十分知る必要がある。福田アジオ氏の主唱する個別分析法とあるいは共通する面もあるかと思われる。

- 注(1)『定年柳田国男集』第二十四卷「明治大正史世相篇」
 (2)『定年柳田国男集』第二十五卷「青年と學問」
 (3)『定年柳田国男集』第十五卷「婚姻の話」

野島本分家に於ける 年中行事の変貌状態

〔概況〕 本家野島茂雄家は、旧名主の家柄で、分家野島清三郎家とともに鍋ヶ谷戸(熊川)に居住する。分家の時期は、表Ⅱにも示したように、明治三十年頃で、治三郎氏の父鹿蔵氏が、喜代松氏の長男力三郎氏の結婚後すぐに結婚し、その



後「田畑屋敷地を含めて一町程もらって(4)」分家したものである。分家のことをシンヤと呼ぶがシンヤは、本家の東側、熊川神社の東に位置し、当時ハラと呼称していた地の一面である。本家は多摩川のハケ上、青梅街道に沿って熊川神社のすぐ西に位置しているが、戦前に現在奥多摩街道と呼んでいる都道が、シンヤの屋敷前を通ることになり、当時本道であった青

梅街道は、現在では裏通りとされている。戦後、シンヤの前の奥多摩街道の交通量の増大は甚だしく、五・六年以前、福生第二小学校の生徒が横断する際の安全確保のため、屋敷のすぐ脇に地下道を設けた。本家前の通りは、車一台分の幅で交通量は問題ない。また表Ⅰに示したように、婚姻圏は広く本家の戸主に嫁いだ女性も、次郎兵衛氏から茂雄氏まで、全て現在の行政市福生以外の地の出身である。ただし分家をした鹿蔵氏のみは、次郎兵衛氏の娘が旧福生村に嫁いだ先で生んだ娘アサ氏を夫人としたもので、ここに地縁血縁の範囲の狭い例が見られるが、治三郎氏の夫人サダ氏は青梅出身である。また治三郎氏は、弟章氏を養子に入れて現在同居している。これとは別に、インキョと呼称される分家が、やはり熊川にあるが、その分家した時期は不明であり、茂雄氏は、「現在の勝之氏が四代目だろう」というが、治三郎氏はわからないという。ちなみに本家の戸主茂雄氏と、分家の戸主治三郎氏とは一まわり十二年の年の差があり、治三郎氏は明治三十四年生まれ、茂雄氏は大正二年生まれである。なお本分家間の合同行事はきわめてまれで、イットウ、イッチ、マキといった名称のもとに統一される関係は存在しない。シンヤは本家に近いせいか交際が多いが、インキョはシンヤほどのつきあいはないようである。

〔年中行事の変化〕表Ⅲに列記した項目は、福生市民俗調査で報告された二十三例を基本として設定したもので、特に旧

熊川村にあって一般的に見られた民俗事象である。というのは旧熊川村と旧福生村では多少民俗事象の違いが見られ、旧熊川村のなかでも内出、南の二地区は他の地区に見られぬ民俗を顕著に残している。例えばサイノカミ行事ひとつとっても、福生市全体の中で行なっていたのはこの二地区だけである。また年代設定は相対的なものであり、本家と分家の戸主からの聞き書きによって作成したもので、記憶についても、また生活している時代についても十二年の違いがあるので、一応戦中から戦後という両者ともに青壮年期にあった時期を大きな目安として把握するように努めた。このため戦中に先立つ時期が最も時間的に長い時期であり、その下限は昭和十一年前後数年と見てよい。この時期を一応その後の民俗変化に比較して最も完成された原型を有するものと仮定して○印で表わすことにした。であるからそれ以後の△、×または◎印は、その時期に比べて、その民俗の行なわれ方がどう変わったかを示すものである。勿論話者の記憶にたよっているため精確は決し難い上に、たった二家だけの資料であるから、その結果から導かれる仮説成果に多少の疑問は残るが、ある種の傾向は見られると思う。また最近代というのは、ここ四・五年の時期と考えてよい。戦後数年も同様である。しかしこれは絶対的なものではない。必要によっては備考欄に数言書き留めて便宜をはかった。

「シンヤは本家がやらなかったことは一切やっていない。

本家のやっていたことを受け継いで、今でもやっている。(5)」という言葉は、両者の行事を表Ⅲで見ればわかるように、本分家ともに、年神棚は作っておらず、五月の菖蒲に関する行事も、十二月一日の馬の正月もやっていないことからうなづける。この点に関しては、分家は明らかに本家の慣習の範囲に属しているのであるが、時代が最近代に下るにつれて、その執行度が本家の方に稀薄化していることは注意すべきである。例えば若水汲みを例にとってみると、戦前から戦後にかけては両家とも行なっていたのが、十年程前から水道がひけるようになったのを機に本家がやめたのに比べ、分家ではその水道から汲むことによって、相不変昔風に若水汲みを元朝の朝早くにやっているのである。また畑ウナイなども分家の方では今でもやっているのに、本家では戦後全たくやらないという。マユ玉作りも、本家が戦中から養蚕をやめたのを機に作らなくなったが、分家の方では今でも養蚕をしマユ玉を作っている。ただ以前のように部屋一杯に飾ることはさすがにここ数年やらなくなったとは言っている。また山の神のタブーも最近まで分家では守っていたのに比べ、本家では早くから氣にかけていない。盆棚作りも本家の方は戦時中から仏壇を利用して簡略にすましている。ナカノクンチ・十五夜・十三夜・アナップサギ団子・どじょう粥等においても、本家の方が執行度の悪くなるのが早い。

桜井徳太郎氏は、『神化交渉史研究』の「習俗変化の過程

と要因」の中で、「変容性の強い家年中行事についてみると、マキ親のほうがヒラマキよりも習俗持続の度合いが高い」という結論を出されたが、そうは断言できない(6)。と指摘された佐藤良博氏の説と同様、私の以上の様な結果からもやはり一概に本家の執行度が高いとは断定できかねる。尤も、桜井、佐藤両氏の調査地域が、ともにマキ結合の強い地を選定しているのに対し、この福生地域ではそのような同族結合の強さは見られないところなので、同列に比較することはできないかもしれない。ただ私が注目したのは、桜井氏が捨家した条件の重要性である。同じ章で桜井氏は次のような注を設定している。

家年中行事の施行に、当主の考え方が表われることはいうまでもない。その考え方は当然ながら本人の教養、思想、宗教観等の諸条件によって左右されるが、当人の性格や経済事情も無視できない。ここではそうした個性的条件や境遇をいちおう除外する。

「個性的条件や境遇」のなかには、年中行事を施行する際の中心人物である戸主の影響力をも考える必要があるのではないだろうか。いわゆる戸主権の充実していた時期に、次代の戸主はどのような立場にあったか、あるいは次代の戸主は、はたして戸主権の充実していた時期に正当にその影響下にあったかどうかという問題である。これを明らかにしようとしたのが、表Ⅱに示した野島本分家の世代交代に関するグラ

フである。

すでに野島本分家にあつては、分家の方に年中行事の執行度の高かったことを見てきた。その要因を世代交代の面から考えてみようと思うのである。力三郎、鹿蔵氏はともに早くから父喜代松氏を失なつたため、その影響力は全つたくないと断定できるだろう。両者が家行事を執行するに値する年代に影響力を与えた人物としては、喜代松氏夫人のキセ氏である。キセ氏は昭和二年に九十才の高令で亡くなつた人物で練馬から嫁いできた方である。いつ頃嫁入りしたかは不明であるが、長男力三郎氏が生まれたのが明治四年で、この時すでに姉が三人いたのであるからほぼ推測できようというものである。このキセ氏が野島家の行事を、次郎兵衛、エイというIの世代から受け継ぎ、Ⅲの世代に伝えたものと見られよう。しかし「分家は本家のやつてゐることだけをやってきた(7)」という言葉が示すように、年中行事に限つては、戦前の民俗事象の執行項目は表Ⅲで見たように、本分家とも同じと断定できる。ということは戸主権の影響力は、野島本分家間にあつてはその執行の過不足になんら作用していないことになる。しかし仮にⅢが早世するようなことがあつたとしたならば、それを受け継ぐⅣと、Ⅱから受け継いでⅢを経てⅣへと伝わつた民俗事象の慣行との間には、多分に違いがでてきたものではあるまいか。そのような仮定は、実際にⅡからⅢへ受け継がれた時生じたはずである。現にセツ氏は、後年「キ

セ婆さんが早後家だったから、このうちは昔風のところが少ない。家の行事が少ない(8)」と言つていたという。ということは、仮にⅠから分家してゐた家があつてⅡ_αを営んでいたとしたならば、当然Ⅲ_αとⅢ₁・Ⅲ₂の家とはちがつた民俗行事の慣行が見られたかもしれないのである。

この仮定が成り立つかどうかは、インキョの年中行事慣行を調査していけばはっきりするであろうが、残念ながらこれに気がついたのがおそかつたため、その点の調査及び論証は次の機会に譲らざるを得ない。

以上の仮説から考察できることは、本分家の行事慣行の執行度を、ただ単に現象面でのみとらえて一般性を出すことの無意味を意味するのではないだろうか。いわゆる桜井氏が捨象した条件を前面に出して、現象面の変化と相関的に見ていかなければ、その執行度の傾向を一般論として提出することはできないということである。

戦後の行事変化を考える際には、特に「個性的条件や境遇」をあきらかにしてかからないと、真の行事変化の傾向を把握することはできない。表Ⅲにもあらわれてゐるように、全体的な一般的傾向としては、両家ともに年中行事の執行度が稀薄化してきてゐる。しかしその傾向が本家に顕著なのはなぜか。私はこの原因を、①年令、②生業、③学歴、④社会的風潮等からアプローチしていくなら、左程不思議とすることもないと思うのである。すでにのべたように①は本家の方がひとま

わり若い。②では分家では、治三郎氏が畑を耕作し、章氏がサラリーマンであるが、本家では借家をもく持つとともに、息子氏はやはり外に出ている。③については聞き出していないので当方の不手際であるが、治三郎氏は「親から受け継いだことだから、馬鹿らしいと思ってめちゃんと生きているうちはやるんだ」と、きわめて意志堅固に、行事の執行につとめている。本家の方ではそのような心理的作用は見られない。

ここに、両家の年中行事執行度の最大のポイントがあるのではないだろうか。⑤心理的作用が、その行事の執行度維持に力があるといえそうである。それは、その人の年令や生業、学歴に起因するにちがいない。いわゆる「個性的条件や境遇」が、年中行事の執行度に影響を及ぼしている。である。おそらく佐藤氏が「マキの本家は必ずしも行事を保持する力が強いとはいえないがたい⁽⁹⁾」「末端分家でも行事を伝える家がかんりの数存在する⁽¹⁰⁾」という、桜井氏に対する批判は、この「個性的条件や境遇」までさぐっていけば解明できることである。仮に末端分家の名実ともに戸主権を握っている人物が本家の戸主よりも年令がまさっていれば、古い民俗慣行を依然として続けているであろうことは十分うなづけることである。その戸主の背景まであきらかにしていらず、年中行事の変化を現象面だけでとらえて、一般性を抽出することは危険であろう。

そうはいっても全体の傾向として年中行事の執行度が稀薄

化していることは表Ⅲの通りである。茂雄氏も治三郎氏も、「私が死んだらもうこんなことはやらなくなってしまうだろう」と言っているように、Ⅳ世代の人々が戸主であるうちが民俗慣行の見られる最後の時期かもしれない。私はⅤの世代がどのような行為を示すか確かめてみたいのである。特に分家では章氏が継ぐことから、本家と執行度の点でどのような差が出るか楽しみになっている。

注(4)野島治三郎氏聞き書き

(5)野島治三郎氏聞き書き

(6)佐藤良博「正月行事の変化について」『日本民俗学』

95

(7)野島治三郎氏の聞き書き

(8)野島茂雄氏からの聞き書き

(9)(10)佐藤良博「正月行事の変化について」『日本民俗学』

95

民俗事象の消滅と復活

それでは民俗事象は消滅する一方なのだろうか。私はそれも断定できないような気がする。表Ⅲに見られるように、△×印が増加するのは戦後から現在にかけてである。その原因には、①万止むを得ぬ事情——区画整理・水道敷設等や、②生活の向上、③作業上の面倒（例えば大掃除、餅搗き、盆棚作り）そして④馬鹿らしい、などといったものがあげられるかもしれない。これらを誘発するのは、いわゆる①ラジオ・テレビの普及、②通勤圏の拡大、③都市化現象に見られる人口流入、④生業職業変化等いろいろあるであろう。こういった社会的現象と民俗事象の変化を相互関連的にとらえることは可能であるが、◎印が見られるのも戦後の一傾向なのである。しかし表Ⅲに限って言えば◎印も話者の心理的、回想的意味あいが多分にあるかと思われるので、そのへんを作業上どう処理するかが問題になる。治三郎氏は、戦後の一時期に村祭りが盛んになったと感じられている。治三郎氏は「敗戦の痛手を不景気の中で、若いものの楽しみとっては祭りぐらいだったので、ひところ割と盛んにやった」と言う。茂雄氏はこのような感慨はもらさなかった。しかし両者に共通している感想は、ここ数年の熊川神社の初もうで客の増大である。二人とも「昔より随分にぎやかになっている」と言っ

ている。勿論福生市の人口の増加が最大の要因であろうことは、表Ⅳに見られるとおりで、ここ四・五年の増加は特に顕著である。しかしこれを単に人口の増加からだけに起因するとは断定しがたい。私はこの三年間毎冬民俗調査その他で正月を家で迎えなかった。ところが今年は久し振りに地元で過したのであるが、志茂地区では、元旦、二日に、祭りのお囃子と同じ調子で笛・太鼓をならして町内をふれまわっているのである。車の背後に数人の青年がすわりこんで囃子を流しているのであるが、その車をひいているのは小学生以下の子供であり、大人がそれを世話しているのである。少なくとも四年程前の正月にはこのような行事は見られなかった。神明社の祭りも囃子を盛んにやり出したのがこれに先立つ数年前であったことを思い返してみると、ここ数年熊川神社に初もうで客が多くなってきたというのは単なる人口増加だけの問題ではなさそうである。「苦しい時代の神頼み」ではないだろうが、神社仏閣への参拝がここ数年増大しつつある、ということは新聞紙上でもとりあげられていることである¹¹。それと並行するかのように「ここ数年、寺社仏閣に集まる若者の数は激増して¹²」おり、鎌倉などは「若者とくにアベックの行列で埋まっている¹³。」という。

参拝者の増大、鎌倉に代表される「伝統文化にひかれる¹⁴」若者。これらは何を意味するのか。いささか家年中行事から逸脱するが現象のおもしろさは、その原因を考えさせずには

おかない。やはりこのような現象に注目された後藤総一郎氏は、鎌倉宮の薪能が「今年は座席定員の十三倍もの申し込みがあったという19。」事例を紹介して、その要因を「共同体精神への渴望10」にあると指摘した。

こう見てくると、家年中行事の執行度の稀薄化を再度考える必要があるように思われる。というのは、野島本分家は福生市内において古くからの家であり、いわば在地の人でありよそ者ではないのである。それはとりもなおさずその地の古くからの行事を、少くともよそから来た人々の家々よりはふんだんに行なっているということである。表IVからもわかるように年代が下るに従って、一戸あたりの家族構成員数の平均値は減少している。それはたぶん、外部からの新参者の増大と関係あると思われるが、そのような家々では、おそらく表Ⅲにあげた項目はほとんど行なわれていないであろう。正月行事を例にとれば、せいせい大掃除を形ばかり行ない、質餅を注文し、近くの神社あるいは有名神社に初もうでに行ぐぐらいのものではなからうか。勿論表Ⅲ以外の正月料理その他の祝いの準備はするであろうが、それは項目とはまた別の話である。周囲がそのようであるから、旧家でもなかなか旧態以前として家行事を続けていけなくなる。採訪でしばしば耳にした、「豆まきする時、でかい声出してやるのが辱かしいようだ」という言葉が、その辺の事情を物語っている。それでは野島本分家とは異なった、新しく福生市に居を構

えた家々での年中行事は、どのように行なわれているのだろうか。残念ながらこれを明らかにする調査は全ったくなくない。福生市のように、その地理的条件がベッドタウンにある町では、数量的にも最も多いであろうサラリーマン家庭における行事慣行の調査をする必要があるであろう。これをすることによって、年中行事ならば年中行事で、どのような事象が行なわれているのかははっきりする。その時はじめて、柳田国男が「子無しと子澤山」でのべた、戦後学問の出版をなす三点の解明に近づくことができるにちがいない。①一体何が残っているのか、②どのように変形されて受け継がれているのか。この二点を解明するだけの調査は、今まで全ったくなされていなかったのではないだろうか。戦後三十年の間に①何が残ри、②何が変化し、③何が消滅したか。これを明らかにすることによって、日本人の不変性がでてるかもしれないし、あるいはでてこないかもしれない。しかし民俗学の命題を「日本文化の構造と基本的原理を究明する17」ことにおく私としては、この三十年間の変化の中で不変なるものを抽出する作業の必要性を痛感する。そこに民俗事象の消滅化と、祭りの復活といった一見相異なる現象を貫く基本原理が解明できるのではあるまいか。『常民研究』等ではしばしばとりあげてきた都市民俗学への志向もこの基本原理解明の一手順なのである。福生市は、まさにこの都市民俗学を志向するフィールドたるべきであろう。都市民俗学の良否はそ

の後の問題であり、価値判断がえられる程成長した分野ではない。作業の継続と、それに伴う試行錯誤の必要な時なのである。

注(11) 日本経済新聞昭和50年1月13日(月)

「一方、苦しい時代の神頼み」というわけでもないようだが、全国の神社仏閣は正月三が日、史上最高の五千九百五十万人でごった返した(警察庁調べ)。四十三年に三千万人台に突入してから、四十六年に四千万人、四十八年には五千万人と、このところ減少なしの急成長ぶり。」

(12) (13) (14) 日本経済新聞昭和50年1月13日(月)「若者は神社仏

閣へ」

15 (16) 日本経済新聞昭和49年11月15日(金)

後藤総一郎「祭りの復活と現代」

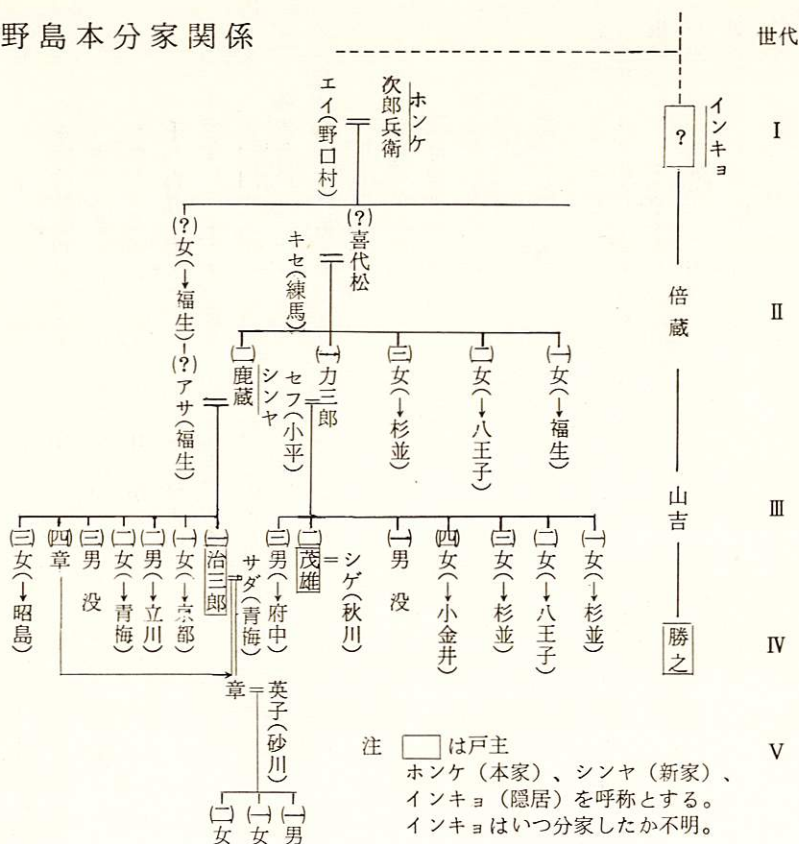
(17) 宮田登「文献と伝象」『日本民俗学』60

ま と め

各家々の年中行事の変化を追求する際、その行事の盛衰を現象面だけでとらえることの困難を指摘したつもりである。戸主の「個人的条件や境遇」、社会的潮流等との関連を積極的に進めていかなければ、真の行事変化は理解できない。また戦後の急激な社会変化とそれにもなう民俗事象の変化、

消滅、復活を根底で支えている原理の解明の必要性もうったえたい。特に福生市にあっては、右のような問題を都市化との関連でとらえていく必要があるだろう。いわゆる都市民俗学への一歩は、数々の試行錯誤のくり返しを我々に要求している。

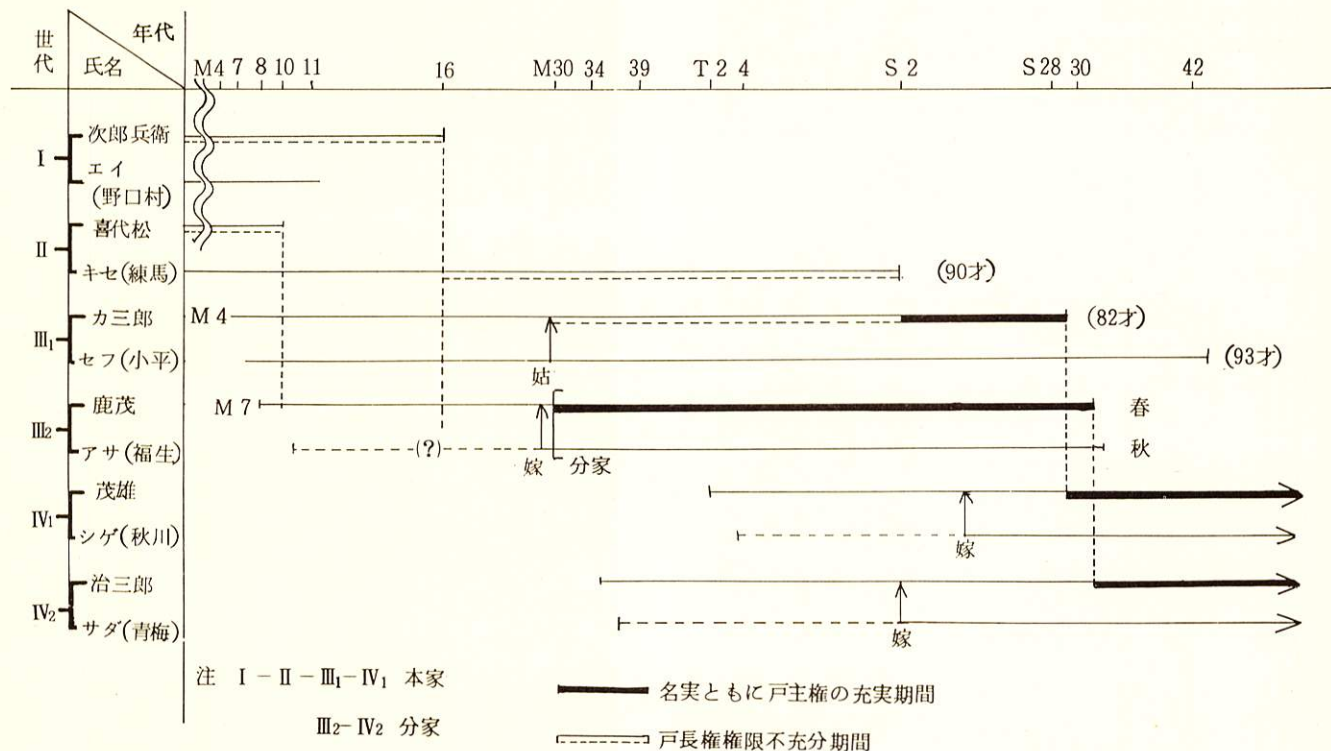
I 野島本分家関係



表IV 福生市の人口増加

	41	42	43	44	45	46	47	48	49
鍋ヶ谷戸 I	2,064人 457戸	2,199 576 (+19)	2,288 605 (+29)	2,307 615 (+10)	2,290 613 (-2)	2,357 653 (+40)	2,397 682 (+29)	2,449 711 (+29)	2,523 753 (+42)
鍋ヶ谷戸 II	1,532人 413戸	1,712 471 (+58)	1,835 501 (+30)	1,842 505 (+4)	1,839 510 (+5)	1,907 556 (+46)	2,025 595 (+39)	2,172 658 (+63)	2,203 685 (+23)
福生市	30,736人 8,725戸	31,959 9,106	35,924 10,457	36,909 10,867	37,943 11,326	38,302 12,248	39,991 12,912		

II 野島本分家の世代交代



Ⅲ 年中行事の変化

野島治三郎家（新家）
（明治34年生）

野島茂雄家（本家）
（大正2年生）

項目	年代	戦中	戦後 数年	最近 代	備 考	戦中	戦後 数年	最近 代	備 考
ス ス ト リ	○	○	○	△	家財道具を出さなくなった。	○	○	△	大がかりな大掃除程度
モ チ ツ キ	○	○	○	△	機械で扱くようになった。	○	○	△	機械でつくようになった。
オ カ マ ジ メ	○	○	○	○		○	○	○	区画整理で田が処分されてからは購入
年 神 棚	×	×	×	×		×	×	×	
オ ハ ラ イ	○	○	○	○		○	○	○	
砂 ハ ラ イ	○	○	○	○		○	○	○	
若 水 汲 み	○	○	○	△	10年前前から水道から汲む	○	○	×	水道がひけたのでやめた
初 も う で	○	○	○	◎	昔よりにぎやかになって いる	○	○	○	除夜の鐘とともに出かける者が多い。
宮 元 寺 年 始	○	○	○	○		○	○	○	
七 草 粥	○	○	○	○		○	○	○	
ウ タイ ゾ メ	○	○	△	×	年番の家から明神会館にかわり、その後廃止	○	△	×	
食 開 き （オソナエクダキ）	○	○	○	○		○	○	○	
燗 ウ ナ イ （クワイレ）	○	○	○	○		○	△	×	
マ ュ 玉 作 り	○	○	○	△	今でも養蚕しているがマユ玉作りは小規模になった。	○	△	×	
小 豆 粥	○	○	○	○		○	○	○	
エ ン マ の 飯	○	○	○	○		○	△	×	
山 の 神	○	○	○	×	土地を賃貸しに出しているためやらなくなった	○	△	×	
悪 比 須 講	○	○	○	○		○	○	○	
豆 ま き	○	○	○	○		○	○	○	
ヤ イ カ ガ シ	○	○	○	○		○	○	○	
稲 荷 講	○	○	○	△	10年前前から明神会館を使用	○	○	△	明神会館を利用するようになった。
ヒ ナ 祭 り	○	○	○	○		○	○	○	
彼 岸	○	○	○	○		○	○	○	
熊川神社祭礼	○	○	◎	○	終戦後春祭りが盛んになりだした。	○	○	△	
菖蒲湯屋根	×	×	×	×		×	×	×	
倉 棚 作 り	○	○	○	△	仏壇を利用するようになった	○	△	△	仏壇を利用
迎え火・送り火	○	○	○	○		○	○	○	
天 王 様	○	○	◎	○	戦後青年がミコシをかつぎだす	○	○	○	
ナカノクンチ	○	○	×	×	戦後数年はミクンチともいった。	○	△	×	
十五夜・十三夜	○	△	△	△	モノモライがなくなった	○	△	×	人工衛星が飛ぶようになったのでやめた。
アナツプサキ団子	○	○	○	△	冬至の日にするようにしている。	○	△	×	
どじょう粥	○	○	△	×		○	△	×	
カワビタリツイタチ （馬 の 正 月）	×	×	×	×	馬がいなかったのではなかった。	×	×	×	
ユ ズ 湯	○	○	○	○		○	○	○	